

教育問題の基礎にあるものについての考察（Ⅸ）

—不確実性の社会における高齢者（Ⅱ）—

田 井 康 雄

（本学教授）

1 はじめに

不確実性の社会に突入しつつある現在、高齢者の不良化の状況とそれを阻止することの必要性について、「教育問題の基礎にあるものについての考察（Ⅷ）—不確実性の社会における高齢者（Ⅰ）—」において考察した。

本論文においてはそれを踏まえつつ、高齢者の能力を活用するための能力としてのセレンディピティ (serendipity) について分析し、そのための教育のあり方について考察していきたい。

2 高齢者の能力を活用する条件

（1）年少世代の高齢者に対する意識変革

現在の年少世代は高齢者を介護と年金の対象としてしか捉えていない場合が多い。それは学校教育において、高齢者についての道德教育の内容は「お年寄りは弱者だから、保護が必要である」という基本的考え方に基づいて行われてきたからである。「お年寄りは弱者である」という前提で、高齢者に対応することを幼い時期より刷り込まれているために、お年寄りを信頼し、尊敬するという意識をもたない子どもが極めて多い。年長世代から年少世代への文化伝達は年長世代に対する信頼と尊敬の意識を年少世代がもつところに実現するものである。したがって、高齢者を「弱者だから保護する」という考え方は、「信頼と尊敬の対象として的高齢者」という意識を成立させない。このような傾向は20世紀後半以降の経済至上主義的イデオロギーの広まりに伴って一般化していった。

経済至上主義的イデオロギーの観点から高齢者は弱者であり、保護が必要であるとは考える

が、信頼と尊敬の対象にはなりうるという考え方の教育は行われてきていない¹⁾。また、核家族化の進行に伴って、普段の生活で、高齢者と同居しない生活形態の一般化から、子どもたちが日常的に高齢者とともに生活する機会も少なくなってきた。その結果、現在の若者で高齢者に対して信頼と尊敬の感情をもつ人々は極めて少ないと言わざるをえない状況にある。

少子高齢化の顕著な現代社会において高齢者の労働力を導入するためには、年少世代の高齢者に対する意識を変化させなければならない。現実には若者のなかには高齢者がいつまでも働く社会を実現することによって、自分たちの働く場がなくなるのではないかという危惧を抱く者は少なくない。このような考え方は従来の高齢者に対する誤った捉え方（経済至上主義的な捉え方、つまり、高齢者は社会的弱者ではあるが、文化的価値をもつ存在であるという捉え方ができない）の教育を受けてきた結果である。少子高齢化が問題にされていながら、社会全体の一般的考え方は子どもを増やすための施策のみが問題にされ、少子高齢化社会という社会の特徴（とりわけ、高齢者の能力活用）を活かした社会制度のあり方についてはほとんど真剣に検討されていない現状にある。

経済至上主義的イデオロギーが充満していたバブル期以降の社会においては、社会全体が高齢者の経験や技術、文化的価値という具体的能力の活用の必要性を認めなかったため、年少世代はそのような高齢者の本来の価値を教えられていない状態に置かれてきた。その結果、現在の若者には、高齢者に対する信頼と尊敬の気持

ちがあらわれてこない場合が多いのである。全く知らない高齢者に対して「おじいちゃん、おばあちゃん」と呼びかけることに何の抵抗も感じないこと自体が、高齢者の立場に立っていないことであることすら理解できない若者は少なくない。高齢者に信頼と尊敬の感情をもっているなら、見知らぬお年寄りに「おじいちゃん、おばあちゃん」という言葉で呼びかけることには躊躇するはずである。少なくとも学生が大学の教授に対して「おじいちゃん、おばあちゃん」とは決して呼ばない。それは、暗黙のうちに大学教授に対する尊敬（あるいは畏敬）の感情をもっているからである。これは戦後教育の一つの欠陥のあらわれであると言うこともできる。民主主義的な意識を広めることが儒教倫理を否定し、平等主義を広めてきたのであるが、日本社会特有の文化には、高齢者に対する尊敬心が常に存在してきた。今後（従来の価値観が根本から崩壊する）不確実性の社会において、高齢者に対する従来の常識とは異なる考え方の普及とともに、新たな労働役割分担社会になった場合、高齢者に対する信頼と尊敬は社会全体の維持・発展に不可欠の基礎条件になってくる。そのような意味で、日本文化の再評価とその文化的価値の教育が行われなければならない。

戦後日本の教育は、戦前の教育を否定するために世界の文化的価値に対する評価と同時に、日本の文化的価値に対する不当に低い評価がなされ、それに基づく教育が行われてきた。その結果、日本人の意識に、日本の文化財に対する正当な評価をしていない若者世代が多いと言わざるをえない²⁾。つまり、戦後の日本人は愛国心の教育をされてこなかっただけでなく、日本の文化や歴史に対して正当な評価をする教育を受けてこなかったために、それに伴って、高齢者に対して信頼と尊敬の感情をもたないのと同様に、日本の文化や歴史、さらには、道德教育の軽視傾向が続いてきた³⁾。

高齢者に対する年少世代の意識改革のためには、日本の文化に対する尊重が必要であり、その基礎には戦後日本教育がほとんど取り上げてこなかった愛国心の教育が不可欠である⁴⁾。歴

史教育を重視することは、祖先に対する信頼と尊敬心を養う基礎であり、その延長上に年長世代（とりわけ高齢者）に対する信頼と尊敬の感情もあらわれてくるのである。

不確実性の社会があらわれる根本原因は世代間の文化伝達が成立しにくくなることにある。世代間の文化伝達は年少世代が年長世代に対して信頼と尊敬の感情をもつことによって成立してくる。人間は信頼し尊敬している人間や分野を模倣したいという欲求をもつものである。文化伝達の基礎はこのような（被教育者の立場に立つ）年少世代の（教育者の立場に立つ）年長世代に対する模倣欲求によって成立してくる。つまり、不確実性の社会こそ、年少世代が年長世代に対する模倣欲求をもたないことからあらわれてくる現象の一つである。今こそ、高齢者に対して真の信頼と尊敬の意識を養う教育が若者に対して必要なのである。社会全体に高齢者に対する信頼と尊敬の意識をもちにくい経済至上主義的イデオロギーが広がっているからこそ、なおさら一層学校教育において高齢者に信頼と尊敬の感情を養うことができるような教育を行わなければならないのである。そのためには、歴史教育、とりわけ、日本史教育を充実させ、日本の文化や歴史の正当な評価に基づく教育が必要なのである⁵⁾。

このように正当な日本史教育を行うことによって、年少世代は日本の文化や歴史に対する正当な評価を知ることが可能になり、個々の日本人に祖先に対する信頼と尊敬の感情を醸成し、その延長上に高齢者に対する信頼と尊敬の感情を成立させてくるのである。不確実性の社会においてこそ、高齢者に対する信頼と尊敬の感情をすべての若者がもつことによって、高齢者との労働役割分担が実現するのである。

(2) 高齢者のセレンディピティ

高齢者の不良化を防止する要素として、①社会の経済至上主義的イデオロギーの是正、②高齢者の定義の修正、については、「教育問題の基礎にあるものについての考察(Ⅷ)―不確実性の社会における高齢者(Ⅰ)―」において、③年少世代の高齢者に対する意識変革、については、

本論文において取り上げることによって、高齢者を取り巻く要素について考察を続けてきたが、高齢者の不良化を防止する最大の要素は高齢者自身の意識改革である。高齢者が高齢者としてのプライドをもち続けることができるためには、高齢者自身の意識のもち方に変化を起す必要がある。

従来の日本社会において、高齢者は高齢者であるという事実だけで年少者から信頼され尊敬されてきた⁶⁾。このような傾向が崩壊してきたのは、第二次世界大戦後の民主主義思想の導入と資本主義的な傾向から生じてきた経済至上主義的イデオロギーの広まりに起因している。さらに、情報化社会の進展により、社会内における年長世代、とりわけ、高齢者の位置の相対的低下によって、高齢者が信頼と尊敬を受けにくい状況が広まってきたことに起因している。さらに、日本社会全体における核家族化傾向も加わって、高齢者が若者とともに生活することによって日常生活で高齢者の経験や知恵というものを受け入れる機会が失われるとともに、社会保障制度の充実（介護制度と年金制度に代表される）に伴って、高齢者が信頼と尊敬を受けにくい外的条件がそろいつつあることはすでに明らかにした。

定年退職を迎え、老後は悠々自適な生活を楽しもうとしていた高齢者がそのような悠々自適な生活を送れないのは、自らの子や孫に信頼され尊敬され愛情深く迎えられている実感がもてないからである⁷⁾。高齢者には無限の自由時間があるが、それを晴耕雨読によって悠々自適に過ごせるためには精神的余裕がなければならない。その精神的余裕は自らの子孫との「心のつながり」という前提によって成立してくるのであるが、現実社会においては社会保障制度という国の制度によって悠々自適な生活が送れると考えられている。しかし、社会保障制度の充実は高齢者の精神的余裕の外的条件である経済的余裕であったとしても、自らの子どもや孫から信頼と尊敬の感情を日々受けているという内的条件が整っていなければ、高齢者は精神的余裕をもって悠々自適な生活は送れない。悠々自適

な生活の基礎は自らを取り巻く人々との心のつながり（とりわけ、周りから信頼され尊敬されているという意識）が存在していなければならない。心のつながりの希薄な人間関係においてはいかに経済的な豊かさが保障されていても、悠々自適な生活は送れない。社会保障制度の充実した北欧諸国において比較的自殺率が高いのは、北欧諸国自体が経済至上主義的イデオロギーから完全に脱却ができていないことと高齢者と若者の間の十分な心のつながりをもてないことによっていると言うことができる⁸⁾。

このような現状において高齢者自身の意識転換が必要になってきている。年長世代である高齢者は本来年長世代の特徴である未来志向性をもっている。しかしながら、その未来志向性は自らの子孫との関係において成立してくるものである。それゆえ、現在のように子や孫が高齢者に信頼も尊敬もしない場合、高齢者は子や孫に対して自らの未来を託す気持ちにもなれない。それこそが不良老人発生の構造であることはすでに明らかにした。高齢者が未来志向性をもちえない理由は、それまでに、自らの子や孫に対してもっている意識が子や孫自身によって裏切られると感じるために生じる意識である。つまり、自ら描いた予想通りの老後を迎えられないことに対する失望から、未来志向性ももち続けることが不可能になってしまうのである。また、この自らの子や孫に裏切られたという意識は単に自分の子や孫に対してだけでなく、年少世代全体に対して向けられる。「最近の子どもは…変わった」という意識こそ、年少世代に対する不信感のあらわれであり、年少世代に自らの未来志向性が評価されず、それを託していきたいという欲求をもつことができない結果あらわれてくる意識である。

以上のような構造で高齢者は未来志向性ももち続けることができなくなってしまうのである。自分の予想通りの高齢期を迎えることができなかったことに対する失望から、未来志向性を失い自暴自棄になって現在志向化することが不良老人化の過程である。このような不良老人化の過程を阻止するためには、自らの予想通りの高

齢期を迎えられなかったときの失望感から新たな可能性を導き出す能力が必要であり、そのような能力こそがセレンディピティなのである。

「セレンディピティは、外からの偶然のシグナルを受けてのひらめき⁹⁾」であり、「偶然の発見をもたらす能力¹⁰⁾」である。このような「偶然の思いがけない発見は、科学の分野だけで生ずることで見られる現象ではありません¹¹⁾」と言われるように、人間の日常生活において常に生じている現象である。予測を立てたがその予測通りにならないということは、日常的にありふれたことである。むしろ予測通り物事が進んでいくことの方が少ないのが現状である。予測通りの成果が出なかった場合、一般には失望したり自暴自棄になったりしてしまうことが多いが、そのままでは何の成果もあらわれない。予測通りの結果が出なかったことに新たな意義を見出す能力こそが、セレンディピティなのである。自然科学の研究においては、仮説に基づく実験が成功することは極めて少なく、その失敗の原因を吟味・研究することによって、そこから、予測しなかった成果を大切にすることが重大な発見に繋がることが多いと言われている。

「セレンディピティの本意は、知性を働かせながら同時にべつな視点から眺めていると、偶然すばらしいものを見出す¹²⁾」能力であり、不確実性の時代において極めて重要な意味をもつ能力であると言することができる。何が起るか予想しがたい不確実性の時代において、未来を予測し、その予測の失敗から成果を導くというセレンディピティの能力は不可欠な能力である。

本来大人としての性格である未来志向性をもつ年長世代はその未来志向性ゆえに年少世代に対して文化伝達を行い、社会の維持・発展の努力をするのである。その意味において年長世代の未来志向性をもつ意義は大きい。しかしながら、現役生活を引退した高齢者はこの未来志向性のゆえに、その未来が期待通りにならない場合、失望から自暴自棄になってしまい、高齢期における不良化現象が生じてくるのである。とりわけ、高齢者の能力を正當に評価しない経済至上主義的イデオロギーが広まっている現代社

会、さらには、今後進んでいくだろう不確実性の社会においては、高齢者が未来志向性をもち続けることによって、現実社会の労働力分担に参加していかなければならない。このような意味において、高齢者がセレンディピティを身に付けることには、極めて大きな意義があると言することができる。

不確実性の社会において、高齢者が年長世代としての役割を演じ続けるためには、自らの未来に対する期待が裏切られたときでも、その事態に積極的に対応し、新たな（自らの存在を評価し直す）察知力(sagacity)が必要である。「“偶然の一大事”がいつもどこかで起きている¹³⁾」のであり、そのことを発見するための能力こそが察知力である。未来志向性をもつ人は未来に対する予測を常にもつものである。しかしながら、その予測は必ずしも当たる場合ばかりではない。そのときに、落胆するか、新たな可能性を得る機会と理解し、その新たな可能性を察知する能力（セレンディピティ）をもつかによって、その予測が外れたこと自体がマイナスに機能するか、プラスに機能するかが決まってくる。セレンディピティとは、このような予測不可能な未来をプラスに利用するための能力なのである。それゆえにこそ、今後の不確実性の時代において、とりわけ、高齢者はこのようなセレンディピティを身に付け、不確実性の社会に積極的に対応していくことによって不良老人化することはなくなるのである。

高齢者を取り巻く社会環境がいかなる状態になろうと、高齢者自身の積極的なセレンディピティによって困難を切り拓いていく能力をもつことが必要になってくる。ここでセレンディピティの構造について考察していく。

3 セレンディピティの構造

セレンディピティは人間が未来の不確実な出来事に対する予測をし、その予測が外れるときの否定的状況を肯定的に解釈し直して新たな可能性へと発展させていく能力であり、これからの不確実性の社会を生き抜く上で不可欠の能力と言することができる。このセレンディピティと

いう能力は、その前提において未来志向性が存在していなければ成り立たない。それゆえ、セレンディピティを問題にする対象は年長世代が中心になるのであるが、ここでは、高齢者と高齢者を取り巻く社会環境を分析する意味で、現在志向性とのかわりについてでも考察したい。

(1) 未来志向性とセレンディピティ

年長世代の特徴である未来志向性は未来について実現する価値の予測と、それを目標にして努力する一環としてあらわれてくる訓練の意義を認め自ら努力していくことを可能にする要素である。しかしながら、あらゆる年長世代が常にそのような未来志向性をもち続けることができるということにはならない。それは、人間が大人になるということ自体がある年齢で機械的に成立するというようなものではなく、徐々に大人としての性格である未来志向性をもつようになってくるものであるからである。それゆえに、未来志向性をもつようになった人間でも、現在志向性へと逆戻りする場合も少なくなく、高齢期になってから現在志向性へ回帰することによって不良老人化現象が生じてくると言うことができる。ただ周りの人々（とりわけ年少者）に信頼され尊敬されているという強い認識をもっている場合、不良老人化現象はあらわれにくい。

未来志向性から現在志向性への回帰とは、未来に対する予測を目標として努力したが、その目標が達成されず、むしろ自らの予測が外れ、落胆した結果、新たな可能性を見出すセレンディピティを欠いている場合に起る現象である。未来志向性自体が未来に対するプラス予測であり、それを現在志向性に逆戻りさせないための能力こそが、セレンディピティであると言うことができる。つまり、セレンディピティは未来志向性を維持できるための能力であり、一度大人になった人が子どもへ逆戻りすることを防ぐ自己制御能力と言い直すことができる。

子ども（年少世代）から大人（年長世代）への移行は教育の目的であり、シュライエルマッハーによると、「人間が成年に達する（mündig）時、すなわち、年少世代が自主的な方法（auf

selbständige Weise）で、倫理的課題を果すことに協力して、年長世代と対等の立場に立つとき、教育的はたらきかけは終る¹⁴⁾」とされているように、一度年長世代になった人間が年少世代に後戻りすることは基本的にはありえない。それは大人（年長世代）としての未来志向性を一度身に付ければ、子ども時代にもっていた現在志向性の無意味さを十分に理解しているからであり、そのこと自体が大人である一つの基準になるからである。

シュライエルマッハーにおいては、本来大人になって未来志向性をもつということは、そこに同時にセレンディピティの能力ももっていることを意味しているのである。未来志向性によって立てた予測が外れても、その結果、新たな可能性を見付け出すことができるからこそ大人であり、その困難を自ら解決していく能力をもっていること自体が大人の特徴であるとシュライエルマッハーは考えていたのである。シュライエルマッハー自身はセレンディピティという言葉を用いなかったが、彼の未来志向性という概念には、セレンディピティの要素が十分含み込まれていたと考えることができる。未来志向性という概念自体がセレンディピティを成立させる基礎概念であり、未来に対する予測の失敗をさらに克服するからこそ未来志向性になるのである¹⁵⁾。それゆえ、セレンディピティは大人の人間が必然的にもつ能力であり、そのような能力をもたない大人は社会的逸脱者ということになる¹⁶⁾。

子どもから大人への発達とは現在志向性から未来志向性への転換によって実現されていく。しかしながら、未来志向性には未来に対する期待や予測を前提にするがゆえに、その期待や予測が外れることはよく起ることである。その場合、未来志向性を維持しつつ新たな方向の未来へと修正することが大人の生き方であり、そこにひとりでにセレンディピティの能力が伴っているのである。大人が未来志向性を維持し続けることができるのは、このセレンディピティの能力をもつことによるのである。セレンディピティなしに未来志向性が定着することはない。未来

志向性をもつこと自体が未来に起る困難に打ち克つ必要性を生み出すのであり、それこそが大人としての生き方の最大の特徴となってくるのである。

大人になって、既存社会を維持・発展させるべき立場に立つようになると、人間はさまざまな困難に直面することがあっても、その困難を何らかの形で克服する努力をする。そのような困難を避けている人間は、いつまで経っても大人に成り切れない人間という評価を受ける。大人としての生き方には、常にストレスを伴うという一般的常識のもとに「大人になる」ことが実現していくのである。そのようなストレスに耐えうる耐性こそが、子どもから大人への発達の成果としてあらわれてこなければならないのである。未来におけるさまざまな困難を克服し、新たな未来を切り拓いていく。それこそが大人の人間としての生き方である。そのような生き方のできない人は、社会的ひきこもりやニート、さらにはアウトロー(社会的逸脱者)になってしまう。つまり、大人としての未来志向性を維持できること自体、セレンディピティの能力のあらわれであると言えることができる。

「何かひとつ新しいことを考えてやろうと思って、見たり聞いたり話したりしているとき、パッとヒントを得て新しい発見や発明をする¹⁷⁾」能力は高次脳の発達しているすべての人間に共通する能力であるが、その能力を積極的に利用するかしないかの能力こそ、セレンディピティの能力なのである。年長世代の特徴である未来志向性はセレンディピティの能力を伴うことによって、年長世代に年長世代としての積極的役割を実現可能にしている。つまり、セレンディピティは年長世代の未来志向性に積極的意義を与える能力であり、それなしには、未来志向性は単なる楽観主義的空想主義者を生み出すことになるか、厭世主義的ひきこもりを生み出すことに繋がってしまう。未来に対して積極的にかわり、未来を切り拓いていこうとすることこそ、年長世代の使命であり、それが年長世代の未来志向性の本質でなければならない。そのような意味においても、年長世代の未来志向性に

はセレンディピティが常に伴わなければならないのである。

年少世代が教育されることによって年少世代としての現在志向性が未来志向性へと変化していくのであるが、年少世代自身が未来のことを考えることもないことはない。ただ年少世代が未来のことを考える場合は、「バラ色の未来」という言葉に代表されるように、理想的・空想的未来であり、非現実的未来なのである。年少世代にいる子どもは、その未来を現実化するための具体的方法やそのための訓練という考え方をもたない。単なる空想的未来であり、そのための具体的実現方法を一切考慮しないがゆえに、年少世代は現在志向性という性格をもつと言えるのである。

それに対して、年長世代は未来の目標や理想を実現するための具体的方法を工夫し、さらには、その方法の試行錯誤を行いつつ、さまざまな方法に応用していくという形で未来志向性を実現していくのである。それゆえ、年長世代の未来志向性にはセレンディピティが必然的に伴っていなければならないのである。年長世代から年少世代への文化伝達である教育のなかには、大人としての未来志向性を成立させるための能力であるセレンディピティの教育・訓練が含まれていなければならない。セレンディピティこそが、世代間の教育成立の目に見えない要素なのである。

(2) 現在志向性とセレンディピティ

年少世代の特徴である現在志向性は、欲求が生じたときにその欲求を実現することしか考えない性質であり、その欲求を実現することがその後にはいかなる結果をもたらすかについてはほとんど考慮しない性質である。シュライエルマッハーによると、「人間の生活は常に各個人のうちからあらわれてくる生命活動 (Lebenstätigkeit) と各個人に対する他人の影響 (Einwirkung) という二つの要素から構成されている¹⁸⁾」のであり、子どもの生活についても子ども自身の生命活動と、それに対する周りからの影響のなかで成立してくる。それこそが子ども独自の生命活動である遊び (Spiel) なのである。ただそ

の遊びは、その結果については一切考慮しないで、欲求のままに行われる自己活動としてあらわれてくる。それゆえ、子どもの自己活動である遊びは現在志向性を示す典型であると言うことができる。純粋な子どもの遊びに子どもが集中する姿は、子どもの現在志向性である「子どもらしさ」のあらわれである。

しかし、子どもの自己活動である遊びも「各個人の生命活動と各個人に対する周りからの影響」によって成立してくるのであるから、大人の未来志向的要素を含む影響も徐々にあらわれてくる。ここにシュライエルマッハーの「人間は生のはじめから完成を求めて発達を遂げていく十分な根拠を自らのなかにもっている存在である¹⁹⁾」という言葉がもつ意義があらわれてくるのである。人間の基本的性格が現在志向性から未来志向性へと発展していくのは、人間の本質に周りからの影響を受け入れる要素があり、それこそが人間の成長・発達に対する教育の重要性なのである。

「年長世代から年少世代へのはたらきかけ²⁰⁾」を教育と考えるシュライエルマッハーの考え方には、人間の教育的有機体としての根拠に基づく構造があったと考えられる。この世代間教育の考え方のなかには、知識や技術の伝達という実質陶冶的内容だけでなく、未来志向性という基本的なものの考え方の伝達も含まれているのである。

現実には子どもが現在志向性的存在であるということは、必ずしも子どもが未来を空想したり、未来を期待したりしないという意味ではない。むしろ現実の厳しさを経験していない子どもは素晴らしい未来だけを空想することは多い。ただ理性的に現在を未来に結び付ける手順を踏んでいくことができないという意味で、子どもには現在志向性という性格があらわれてくるのである。未来に対して理想的目標を掲げ、それに向かって具体的努力を継続していく能力こそが未来志向性を成立させるのであるが、子どもにはそのような性質がないのである。未来志向的能力は教育によって養われるか、自らの失敗体験を通じてその克服に努力する意志に導かれな

ければならない。この過程においてセレンディピティの能力が成立してくるのである。つまり、現在志向性が未来志向性へと発展してくるのは、単純に「遊び」を「訓練」に変化させるという表面的理解ではなく、その変化の背後に現在志向性にセレンディピティの要素が加わることによって未来志向性へと変化していく構造が読み取れるのである。

それゆえに、子どもにセレンディピティの能力はない。子どもが大人からのさまざまな影響を受け、現在志向的活動に「よりよい」改善を志向し、その試みの失敗を繰り返すうちにセレンディピティの能力が付いてくる。失敗を失望に結び付けるのではなく、失敗を「幸福な偶然²¹⁾」と理解できるようになること自体が未来志向性の本質なのである。つまり、「未来志向性＝現在志向性＋セレンディピティ」の公式が成立するのであり、セレンディピティは「肯定的思考の力（The Power of Positive Thinking）²²⁾」によってさまざまな困難を克服することで思いもよらない成果を掴み取る能力なのである。

（3）セレンディピティ成立の要件

セレンディピティという概念は1754年にホレース・ウォルポール（H. Walpol, 1717～1797）がお伽話で用いた概念であり、セレンディップの三人の王子が、「偶然の察知により思いがけないものごとを発見することにこじつけて、これをおまじないの不思議な力として“セレンディピティ”と名づけ²³⁾」たことに由来し、それをR・K・マートン（R. K. Merton, 1910～2003）が1945年に科学分野に導入した。自然科学においては、仮説を立て、それを実験によって証明する過程で生じる失敗に新たな意義を発見する必要性が重要な意義をもつがゆえに、仮説どおりの実験結果が出なかった場合に新たな仮説設定に不可欠な能力としてセレンディピティが評価されたのである。

仮説を立てることは未来志向性の基本であり、その未来の出来事が予測通りいかなかった場合にそれを失敗として落胆するか、その失敗から新たな仮説を立て未来を切り拓いていくかの分かれ目にセレンディピティの能力があらわれて

くるのである。失敗から新たな仮説を立てるために必要な能力はユーモア (humour) である。「ユーモアは精神的集中力である希望の生態学 (Biology of Hope) の重要な側面²⁴⁾」である。セレンディピティを成立させる心の余裕はユーモアの精神に導かれるのである。さらに、失敗に屈することなく、そのようなユーモアをもつことができるのは自らに対する自信 (self-confidence) である²⁵⁾。科学の新たな進歩のための発明・発見には必ずしも研究一筋を貫くよりも、無駄に思えることや、目的に関係のないことを無視するのではなく、積極的に吟味することが必要なのであるが、人間の一般的な生き方におけるセレンディピティは未来志向性とユーモア、さらには、自信が最低限必要な要素になってくるのである。

ここでセレンディピティを成立させるそれぞれの要素について考察を進めることにする。

① 未来志向性

現在志向性を未来志向性へ転換するためには、セレンディピティが重要な要素になることはすでに明らかになった。現在志向性のままの状態では、未来に対する期待や予想は実現可能性とは無関係な単なる空想や幻想に過ぎない。ただセレンディピティが成立する前提条件として、未来志向性がある程度定着していることが必要である。そのような意味において、セレンディピティという能力は子どもにはあられない。セレンディピティが成立するためには、未来に対する真剣な思い入れが必要であり、それを実現する強い意志と目的をもたなければならない。これこそが自然科学の仮説証明に対する研究者の目的意識である。同様のことが未来志向性をもつ年長世代において、既存社会の維持・発展への思い入れとしてあらわれてくる。未来志向性は真剣に未来のあり方を考え、そのための目標を設定し、実現に努力するところにあらわれてくる。そのような未来に対する真剣な取り組みこそが、セレンディピティの能力によっているのである。年少世代が未来志向性をもつことができないがゆえに、セレンディピティの能力をもたないのであり、それは年長世代が年少世

代に行う教育的訓練によって成立してくる未来志向性に基づいて成立してくる重要な内容でなければならない。ただ年長世代としての未来志向性はその未来の具体的改善を実現しなければならないのであるが、改善計画は必ずしも成功するものではなく、その目的実現過程において失敗はつきものである。そのような失敗によって、目的や計画を放棄してしまうことは年長世代には許されない。失敗の原因を究明し、新たな工夫や改善を加えた計画を練り直せるからこそ、現状社会を維持・発展させるべき立場である年長世代の役割が成立してくるのである。

未来志向性は単純に未来を空想することではなく、未来に対して積極的にはたらきかけることでなければならない。未来に対する積極的なはたらきかけには、その成果に対する評価を行う必要が伴う。つまり、未来に対して責任をもつことが未来志向性の重要な条件になってくるのである。大人の性格である未来志向性は教育的訓練によって徐々に生成してくるものである。

ホレース・ウォルポールがセレンディピティの能力に重要な要素としていたものに、偶然 (accidents) と察知力 (sagacity) が挙げられる。「偶然的出会いは予測された出会いとくらべると一般的には悪い結果となるが、少ない機会としては成果がよくなることもある²⁶⁾」。それゆえ、偶然から得られたものを成果として認める察知力の意義は、セレンディピティ成立の重要な要素なのである。このような察知力は教育的訓練の結果養われてくる能力であり、未来志向性ととも生成してくる可以说是できる。

偶然を察知する能力こそがセレンディピティの基礎であるとするなら、察知された偶然をいかに解釈するかによって、その察知された対象そのものの評価が変わってくる。予測不可能な結果が偶然の結果であり、それを肯定的に評価するか否定的に評価するかによって、セレンディピティの成立か不成立かが決まってくる。つまり、偶然の結果を否定的に察知した場合、それは単なる落胆の原因にしかならず、その後には成果となってあらわれてこない。偶然の結果を常に肯定的に察知することによって、その

成果を何らかの目的に利用しようとする意志もはたらいてくる。ここにユーモアの意義があらわれてくるのである。

未来に起る予測不可能な偶然の出来事を肯定的に察知することがセレンディピティを成立させるわけであるから、その前提には、未来志向性は不可欠の要素になる。また、未来志向性自体が肯定的に未来に対応するという前提から成立するのであるから、年長世代、とりわけ、高齢者にとってセレンディピティは不可欠の能力ということになる。未来に対する肯定的対応を成立させるためには、予測外れの結果を肯定的に受け止める必要があり、そのためにはユーモアと自信が不可欠の要素になってくる。そこで、次にユーモアについて取り上げることにする。

② ユーモア

「ユーモアは、おそらく、人間精神の最も重要な特質である²⁷⁾」と言われ、人間が人間という種を特徴付ける一つの特質と考えられる。ユーモアは人間固有の能力であり、人間の文化を豊かにしてきた。ユーモアには二つの意味がある。「ひとつは、おかしさをよびおこす行動、話、文章のはたらき。もうひとつは、会話や文章の、おかしさ、おもしろさを感知する能力、表現する作用²⁸⁾」である。セレンディピティに繋がるユーモアの能力とは、察知力に伴うユーモアである。予測不可能な未来の偶然を察知し、そこにおかしさ・面白さを感知するユーモアがあれば、精神的に新たな未来志向性に繋がるエネルギーがあらわれてくる。おかしさ・面白さは心に余裕を与える。心に余裕与えられるからこそ、失敗にもひるまず新たな試みを工夫することができるのである。

未来志向性をもつ大人が大人として未来志向性のゆえに生じる不確実な未来に対する不安に打ち克つことができるのは、ユーモアに基づく心の余裕によると言うことができる。「心の働きであるユーモア、知性の働きであるウィット²⁹⁾」と分けられるが、さらにジョーク能力は大人の未来志向性のもつ厳しさを和らげるための大人の能力である。子どもにはユーモアも、ウィットも、ジョークの能力もたない者もいる。そ

れは子どもが本質的に現在志向性をもつ存在だからである。これらの人間特有（とりわけ、大人特有）の能力は大人の未来志向性をもつ厳しさを和らげるために、人間の成長・発達の過程において徐々に身に付けてくる能力である。

未来志向性は不確実な未来に対応するための性質であるため、訓練的要素を備えていなければならない。その訓練的要素が与えるストレスを和らげるためにユーモアは不可欠である。特に大人としての未来志向性をセレンディピティに繋げるための試行錯誤に生じるストレスは大きく、ユーモアは必要不可欠な要素になる。ユーモアはウィットやジョーク能力の原動力になるものであり、特に重要である。

アルフォンス・デーケン（A. Deeken, 1932～）は「ユーモアと笑いが心を明るくし、それが健康の維持にも役立つことを論証し、老いを楽しむ道を、さらには死と対峙する方法をさわやかに示している³⁰⁾」。デーケン自身、「ジョークはタイミングの良さや、言葉の上手な使い方など、頭から頭へのテクニクであり、ユーモアは心から心へ伝える具体的な愛の表現だと思う³¹⁾」とし、ユーモアに特別な意義を認めている。「ほんとうのユーモアというのは、自分自身が、絶体絶命のピンチへ追いこまれ、あたふたしている時に、そのあたふたしている自分を、もう一人の自分が、ゆとりを持って眺めながら、声高らかに笑うことができること³²⁾」であり、常に余裕をもって生きていくことができる人は、ユーモアの能力を身に付けている人であると言うことができる。

このようなユーモアの能力は、未来志向性によって未来において生じる予測不能な事態からセレンディピティを生み出させるための心のゆとりづくりに不可欠の能力になっている。未来志向性をもつ年長世代は未来を予測し、その予測通りの状態が実現しなかった場合、そのような予測しなかった状態を肯定的に把握し、そこから、新たな未来を予測していくところにセレンディピティの能力が成立してくるのであるが、その予測通りの状態が実現しなかったことに對するショックを受け流し、肯定的に解釈し直す

ことができる心のゆとりには、ユーモアが必要不可欠なのである。人生には常に予測不可能なことが起る可能性があり、そのような予測不可能な可能性があること自体を「苦痛」ではなく、「おもしろさ」と理解することができる心のゆとりを与えることがユーモアの本質なのである。

デーケンが老いや死に対峙する人間にユーモアが必要であることを解くのと同様の理由で、未来志向性という予測不可能な可能性に対するストレスをセレンディピティに結び付けていくのにユーモアは重要な要素になるのである。

このような「ユーモアのセンスの中核は、自己存在に対するゆるぎなき自信³³⁾」なのである。不確実な要素に満ちた未来に対する期待を導く未来志向性、その未来志向性を肯定的に実現していくユーモアの感覚をもつことができる自信によってセレンディピティが成立するのである。

ここで最後に自信について考察する。

③ 自信

セレンディピティを成立させる未来志向性とユーモア、さらに、自信は互いに繋がった一連の心の作用としてあらわれてくる。年長世代が未来志向性をもつことができるのは、それまでの人生においてさまざまな困難や問題を克服してきた経験を通じて未知の未来に立ち向かうという自信をもつことによっている。ユーモアは心に余裕を与える要素であるが、自信は積極的に未知の状態に挑む意欲を起させる。

高齢者の不良老人化を阻止する条件は高齢者自身が自らの存在そのものに自信をもつことである。その自信はプライドを維持する重要な要素になる。ただし、高齢者の自信は高齢者に対する若者からの信頼と尊敬の感情によって支えられる。現在、高齢者において不良老人化の傾向があらわれてきている原因は、高齢者自身が自らの自信をもちにくい外的条件が整いつつあるところにある。自信は他の人々から信頼され尊敬されることによって自然にあらわれてくる意識であり、経済至上主義的イデオロギーに満たされた現代社会において、経済活動から離れた高齢者が自信をもつことは容易なことではない。ユーモアが心に余裕をもつための条件であ

るように、自信は他者からの信頼と尊敬によって成立してくるものである。つまり、「人間としての自信は、愛されているという確信から生まれる³⁴⁾」のであるから、高齢者が自信をもつためには、高齢者に対して若者が信頼と尊敬の感情をもつことが必要であり、そのような高齢者に対する対応こそが、高齢者自身が「愛されている」という確信をもつことに繋がる。高齢者が年長世代としての未来志向性をもち続けるためには、年長世代としての役割を果たすとともに、そのこと自体が年少世代から期待されているという確信がなければならない。

社会的動物である人間の自信は自分一人でもとうとうとてするものではなく、他の人間との人間関係において信頼され尊敬されているという確信をもてるとき、自然に成立してくる。そのような自信は自らもとうとうとてするものでないからこそ、失敗に次ぐ失敗が重なったとしても、自ら自信を失うことはできない。自信は自らの失敗を克服するエネルギーになるものであり、その意味において、セレンディピティの重要な構成要素であると言うことができる。

人間が自信をもつことができるのは、他者からの信頼と尊敬を実感しているときのプライドによっている。自らの人生のさまざまな経験や技術・能力などを誰かから評価されているというプライドこそが自信成立のエネルギーになるのであり、そのようなエネルギーを引き起すための社会環境が整わなければならない。そのような社会環境は高齢者がつくり上げるというよりは、高齢者を取り巻く社会全体の高齢者に対する対応によって成立してくる。そのような意味において、現代社会は高齢者にとって最も自信を喪失させるような社会環境であると言わざるをえないのである。

従来高齢者が高齢者としてのプライドをもち、年長世代の役割を十分担い続けることができたのには、さまざまな理由³⁵⁾があるが、高齢者のもつ能力や経験を評価する社会が存在したことが第一の根本原因であると考えられる。現代社会においては、世界的レベルで経済至上主義的イデオロギーが広まり、高齢者の役割が期待さ

れなくなった。それゆえに、高齢者に対する信頼と尊敬の感情をもつ若者が減少していることが、高齢者の自信を喪失させているのである。

しかしながら、少子高齢化のさらなる進展が世界的レベルで進んでいく不確実性の社会においては、高齢者としての能力を社会全体で評価しなければならない。つまり、高齢者の能力を経済至上主義的立場から見ても、評価に値する要素を発見できる社会が必要なのである。高齢者が自信をもち、新たな不確実性社会を切り拓いていくためには、高齢者自身が自信をもてる社会構造をつくり上げていくことが必要である。高齢者自身が自らの能力を現実社会のなかで有益に利用されていることが実感できる社会構造の構築が目指されなければならない。科学技術の進歩によって、あらゆる産業における省力化はかなり進んでいる現代社会において、高齢者の能力を利用することは不可能ではない。高齢者の能力とは、高齢者の経験と技術に基づく能力であり、若者の能力と同様のものではない。それゆえ、高齢者の社会参加の進展が若者の労働機会を奪うことはないのである。

以上のような意味において、現代社会において高齢者に自信をもたせるためには、一般的な人々的高齢者に対する「高齢者は弱者である」という先入観を捨て、社会的役割を高齢者に分担する仕組みづくりこそが求められる。

少子高齢化社会において、高齢者がプライドをもてる社会をつくり、そのプライドの下に自信ある行動によって具体的な形で社会的役割を担っていける社会構造づくりをすることは、今後の不確実性の社会を未来の新たな構造をもつ社会として確立していくことができる第一歩になる。

高齢者がセレンディピティを身に付け、社会活動に積極的に参加し、社会全体の進歩に貢献できる新たな構造づくりをすることによって、高齢者だけでなく、人類社会全体の新たな進歩が実現していくのであり、単なる高齢者問題解決の一施策に留まらない、新時代の新たな社会構造の構築に繋がると言うことができるのである。

註

- 1) 人を信頼し尊敬することは、他者から教えられるべきものではなく、自ら主体的に行うものであるという戦後民主主義的考え方を尊重するあまり、このような教育については日本では戦後一貫して消極的であり続けた。
- 2) 例えば、法隆寺は世界最古の木造建築物であるという事実を正当に評価している日本人は多いとは言えない。
- 3) ちなみに、日本の古代史研究は世界的に見て非常に遅れている。邪馬台国や卑弥呼の問題が取り上げられているが、その2世紀後半から3世紀にかけての歴史を世界中のどの歴史と比較してもその研究が極めて遅れていることは明白なことである。それ以前の縄文時代（紀元前1万年前後～前4世紀）や弥生時代（紀元前4世紀～後3世紀）の歴史については考古学的研究はある程度進んでいるものの、歴史研究は十分な成果を上げているとは言いがたい現状である。
- 4) その意味において、新教育基本法において、「…我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」が第2条の5項に示されている意義は大きい。
- 5) 第二次世界大戦終了後、アメリカ教育使節団が日本にやってきてまず行ったことが、修身、国史、地理の即時停止であったことを思い起せば、戦後の歴史教育（とりわけ、日本史教育）が戦前の反動として日本文化に対する評価を低くしていたことは明らかである。
- 6) とりわけ、日本は儒教倫理的な年功序列的意識が基本的道徳であったため、高齢者であるだけで、すべての人々に信頼され尊敬される社会状況であった。
- 7) 高齢者自身も、経済至上主義的イデオロギーのなかで生活することによって、自らの経済的地位の低下に伴い卑屈化する傾向があることも認めざるをえない。
- 8) 日本の自殺率の高さは、経済的理由によっている。これは日本社会の経済至上主義的イデオロギーの深刻さに起因している。
- 9) 茂木健一郎著『ひらめき脳』新潮新書、2008年、171頁。
- 10) 澤泉重一・片井修著、同上書、27頁。
- 11) 澤泉重一・片井修著、同上書、19頁。
- 12) 阿刀田高著『ユーモア革命』文春新書、2001年、46頁。
- 13) 日野原重明著『幸福な偶然をつかまえる』光文社、2005年、14頁。
- 14) C. Platz : Schleiermachers Pädagogische Schriften. Mit einer Darstellung seines Lebens. Neudruck der dritten Auflage. 1902, S. 13.
- 15) 予測が失敗したことによって、挫折するということは現在志向性のあらわれであると言うことができる。

- 16) 不良老人とは社会的逸脱老人ということになる。
- 17) 酒井弥著『暮らしのセレンディピティ—環境にやさしい裏ワザ—』技報堂出版, 2001年, i 頁。
- 18) C. Platz : a. a. O., S. 13.
- 19) C. Platz : a. a. O., S. 6.
- 20) C. Platz : a. a. O., S. 8.
- 21) 日野原重明著, 同上書, 6 頁。
- 22) Patrick J. Hannan : Serendipity, Luck and Wisdom in Research. iUniverse, Inc. New York Lincoln Shanghai. 2006, p. 1.
- 23) 澤泉重一・片井修著, 同上書, 30頁。
- 24) Patrick J. Hannan, ibid. p. 2.
- 25) 科学のための哲学として, ハンナンは「重要でありうるおろかな質問」, 「物を偶然落とすこと」, 「感受性の必要性」, 「偶然の必然性」, 「突然の幸運の到来を捕らえること」, 「遺伝記号への試掘者であること」, 「国立衛生研究所を汚染すること」, 「対立する見解」, 「キャリア選択に影響しうるよき指導者」, 「最終思考」を挙げている。(Patrick J. Hannan, pp. 208-214)
- 26) 澤泉重一著『偶然からモノを見つけだす能力—「セレンディピティ」の活かし方』角川書店, 2002年, 98頁。
- 27) 阿刀田高著, 同上書, 44頁。
- 28) 外山滋比古著『ユーモアのレッスン』中公新書, 2005年, 8 頁。
- 29) 阿刀田高著, 同上書, 52頁。
- 30) 阿刀田高著, 同上書, 148頁。
- 31) アルフォンス・デーケン著『ユーモアは老いと死の妙薬—死生学のすすめ』講談社, 2002年, 37頁。
- 32) 松岡武著『ユーモア教育のすすめ』金子書房, 1996年, 71~72頁。
- 33) 松岡武著, 同上書, 159頁。
- 34) 松岡武著, 同上書, 159頁。
- 35) 医学の進歩と医療制度の整備によって寿命の延びが実現し, 高齢者の増加と社会的役割からの解放によって, 高齢者に求められるものが減少したことが基本的理由である。